

今月のスポットライト

今回は 森田定夫 さん

平成10年登録の森田さん。

京都府出身。六人兄弟。

小学生のとき、「大東亜戦争」勃発。

恵まれた体格を活かし、18種目の運動をこなすスポーツ万能選手である。バレーボール、バスケットボール、野球などの球技をはじめとし、砲丸投げ、ハンマー投げ、トラック競技などの陸上競技まで、子供の頃から実業団の時代まで試合となると引っ張りだこの選手だった。

そして、さわやか愛知で有名なのは相撲。森田さんといえば「相撲をしていた人」と皆が口をそろえる。スタッフの中には森田さんは関取だと思っていた人もいたとか。

上加茂神社で行われる九月の神事の烏相撲内取式にも参

今回10年ぶりにさわやか愛知を訪れた。

さわやか愛知との出会いは妻の勧めだった。明治生まれの父、士族の家系。「男子厨房に入らず」という家で育って、真逆の世界に飛び込んだ。

「介護は女性の仕事」と親族からの反対があったが「人の役に立つことに男女の別は無い。親に人並み以上の力を与えてもらったのだから、それを困っている人を助けるのに使う。それができると感謝したい。」

そのうち、姉たちが協力的になった。やがて親族も理解を示すようになった。

「力で意見を押し付けると反発を招く。理解しあいながら関係を築く方法をさわやか愛知で学んだ。」

とはいえ、活動する中で、会社勤めの頃と比べると気になることも多かった。

時間預託のチケットづくりをしていたときのこと。チケット一枚ごとのミシン目をレットで手作業で入れるのが、効率が悪すぎると考えた。すぐに理事長に意見を挙げた。

理事長の回答は「チケットを自分たちで一枚一枚手作りすることで、単位が「円」ではなく「点」であることなどチケットの意義と意味を、みんなに知ってほしいからよ。」

効率だけではない処し方を知った。

培われたプライドとの葛藤も大きかった。障害者のケアに行って鉄板焼きそばと一緒に作った。利用者のよだれが鉄板に落ちるのを見て「自分には食べられない」と思った。持参したおにぎりだけを食べた。それを聞いた妻が「そんな風に考えるならやめたら」と一言。「何のために活動しているの？」

妻に助けられたことは多い。

「プラスになることはどんどん吸収しよう」と決めた。利用者に合わせて話題の予習もした。相手の意図を察して動こうと努めた。

そうして教えられたことを、今度は伝えるのが役目。物事には理由がある。自分中心さわやか愛知で活動しながら、企業人の視点でより良くするための意見を率直に進言し、それが通らないからと口を閉ざすのではなく、結果が出るまで取り組み続ける姿勢。先進的なことを取り入れ、標準化し、情報の整備が大事という森田さんの教訓は、現在のさわやか愛知にもそのまま通ずることが多いなあと考えさせられました。



次回は 吉田世津子さんです